# 国際学部教育の学生評価

## —全体評価の調査事例報告—

荒 井 宏 祐

# Student Evaluation on an International Studies Department Curriculum

Hirosuke Arai

**Abstract**

Various characteristics of student evaluation on the curriculum have been analyzed on the basis of a questionnaire survey conducted on the students at the Department of International Studies of a certain university in Japan.

1 . Students who indicated a degree of satisfaction in their studies in general education courses and specialized courses seem to show a greater eagerness to learn than those who indicated that they were dissatisfied.

2 . In the case of the student groups who are satisfied with their personal achievements in the general-education subjects, the percentage of those who are satisfied with their achievements, in four other subjects including specialized subjects is also high. Thus, it is concluded that general-education subjects contain important factors that determine whether or not a student will be able to have a satisfactory university experience.

3 . The survey indicates that, in the future, further efforts should be made to give more thorough individual guidance to the students in the dissatisfied group and also to improve the methods of classroom-teaching for such students.

**キーワード**

一般教育、学生授業評価、国際学部教育、大学生生活調査、学習指導相談

## はじめに

'91年7月の大学設置基準改定には、いわゆる大学の自己評価条項が含まれている（総則第2条)。この自己評価にかかわる参考情報の一つとして、学部教育の内容、方法、学生の生活指導体制等についての、学生自身による評価があげられることがある。この学生評価の具体的内容、方法はさまざまで、例えば卒業時に一般教育の全授業の評価を求めるものや、個々の授業について統一的な質問により、授業担当教員が受講学生に対し、アンケートを行うものなどが知られている（川上善郎「学内風土活性化と学生による授業評価制度」『一般教育学会誌』通巻第26号参照)。

このたび筆者らは、ある国際学部の学生を対象に、学園生活アンケート調査を試みる機会を得た。ここでは、一般教育等科目区分別の授業満足度や成績自己評価、既存の授業に関する全体的意見、感想、新しい科目、講座の開設や学習サポート指導の要望等を尋ねるなど、個々の授業ごとの個別的評価に比べてより全体的なレベルでの学生評価を試みてみた。最近多くの大学や研究機関、関係学会などで話題になっている、大学教育にかかわる学生評価について、全体的レベルからの接近例を示すものとして、以下その大要を報告してみたい。調査の概要は、次の通りである。

・目的　学生自身による評価を通じて学園生活の充実に資する基礎資料を得る。
・項目　ア　進路、科目選択の動向
　　　　イ　学習と生活の実態
　　　　ウ　授業等への要望
　　　　エ　その他
・時期　'92年12月～'93年1月（4週間)
・方法　配付回収法（教室で説明、回答、回収)
・対象　A大学国際学部在籍の1年～3年生全員　768名（調査時　4年生は在籍なし)
・有効回答数（率)　529名（68.9％)
　内訳　1年生　68.6％、2年生　83.5％、3年生　54.6％
・調査主体　教員の共同研究グループ

なお、今回の調査は全数調査であり、属性差等の有意差検定は行っていない。文中では必要な場合、有効サンプル数やデータの全体的分布状況等を勘案して、10％以上の差のあるものを中心とするほか、傾向を確認するための参考として5％以上の差のあるものをとりあげ、相違の所在を示唆することにした。

## 1．教育内容にかかわる評価

### (1)　科目区分別授業満足度－－一般教育が不評

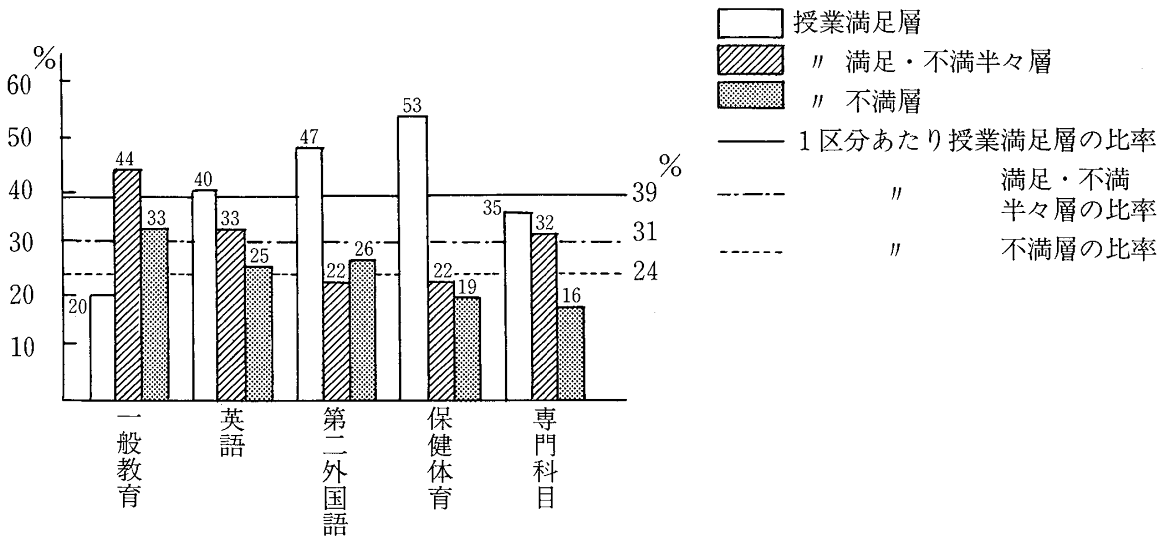
授業についての満足度を科目区分別に、次の5段階で尋ねてみた。

ア　満足のゆく授業がほとんどである
イ　どちらかといえば、満足のゆく授業の方が多い
ウ　満足のゆく授業とそうでもない授業とは大体半々である

エ　どちらかといえば、不満を感じる授業の方が多い

オ　不満を感じる授業がほとんどである

このうち、ア＋イを授業満足層、ウを授業満足・不満半々層、エ＋オを授業不満層の三つにパターン化した結果を、一般教育、英語、第二外国語、保健体育、専門科目の５区分について比較するとともに、１科目区分あたりの分布の平均比率を試算したものが図１である。




N＝529人

**図１　授業満足、不満層の分布（SA）**
**－科目区分別－**

授業満足層の多い科目の上位３位は、①保健体育（53％）、②第二外国語（47％）、③英語(40％）で、一科目区分あたりの平均（39％）を下回るものが、専門科目（35％）と一般教育（20％）の順である。一方授業満足･不満半々層は、同様に①一般教育（44％）、②英語（33％）③専門科目（32％）で、平均値（31％）を下廻るものが、保健体育（22％）と第二外国語(22％)である。さらに授業不満層は、①一般教育(33％)、②第二外国語(26％)、③英語（25％）の三区分で、それぞれ平均（24％）を上廻っている。

ここで授業満足度の科目区分別の順位づけを行うため、前記の五つの回答選択肢ア～オにそれぞれ５点、４点、３点、２点、１点を与え、各回答者実数に乗じた結果をみると、①保健体育（1,740点)、②第二外国語（1,644点)、③英語（1,642点）④専門科目（1,491点）⑤一般教育（1,443点)、となった。今回の調査では、授業満足度に関して一般教育がもっとも不評であることがわかる。

なお、属性別では、成績満足層が多いのは、女子学生、２年生、推薦入学者である。また質問間クロス集計では、満足層と不満層には概して勉学意欲の濃淡差がうかがわれる。

⑵　成績の満足度－専門科目が低い

２、３年生を対象に、それまで獲得した成績が自分にとって満足のゆくものかどうかを

科目区分別に、次の５段階で尋ねた。

ア　満足している

イ　まあ満足している

ウ　あまり満足していない

エ　満足していない

オ　どちらともいえない

このうちア＋イを成績満足層、ウ＋エを成績不満層、オを回答保留層としてパターン化するとともに、１科目区分あたりの成績満足と不満層の分布の平均比率を求めてみた（図２）。成績満足層の多い上位３位は、①保健体育(73％)、②英語(60％)、③第二外国語(59％)で、１科目区分あたりの平均値（61％）を保健体育以外の四区分が下廻っている。また成績不満層では同じく①一般教育（39％）、②英語（37％）、③専門科目（35％）が上位３位を占めており、この三つはすべて平均（32％）をこえている。

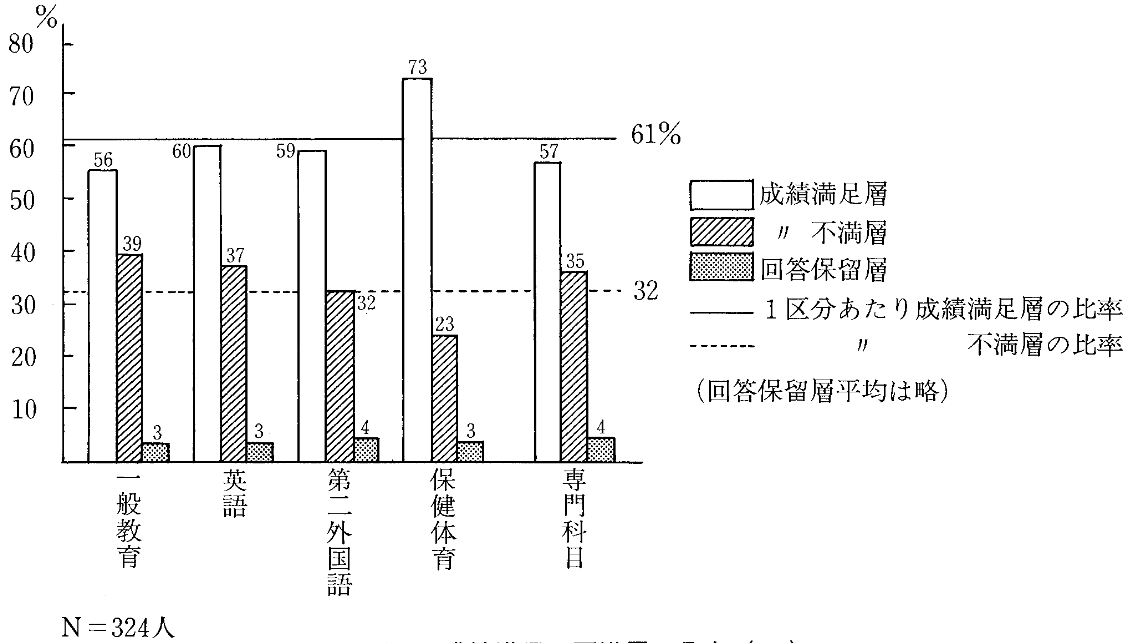



**図２　成績満足、不満層の分布（SA）**
**－科目区分別－**

成績満足度の科目区分別順位づけをみるため、前記の回答選択肢のうちア～エの四つに、それぞれ４点、３点、２点、１点を与えた結果（各区分ともほぼ同数の「オ」は除外）では、①保健体育（940点）、②英語（863点）、③第二外国語（831点）、④一般教育（809点）、⑤専門科目（792点）となり、成績満足度では、専門科目がもっとも低いことがわかった。

(3)　授業満足層と成績満足層との関連－英語は楽勝科目か

次に、この成績満足/不満層と授業満足/不満層との関連をみたのが図３である（回答保留層と授業満足、不満半々層は除外した）。

２－３年生の授業満足層では、授業にも成績にも満足している層が多く、逆に授業には

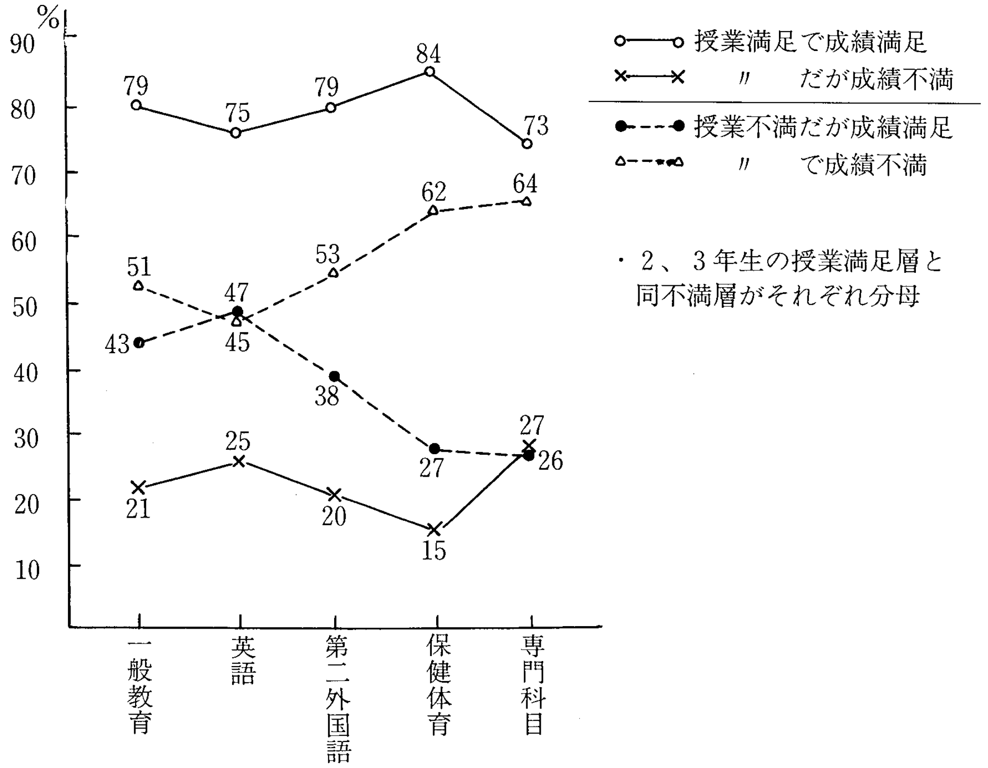



**図3　授業満足・不満と成績満足・不満との関連**
**(科目区分別)**

満足だが成績には不満をもつ層は少ない。しかし科目区分別に一つの特徴がみられる。それは英語に関して授業には不満だが成績には満足している層が多く、授業にも成績にも不満な層と同程度いることである(47%と45%)。英語は学生の一部からは、他科目より“楽勝科目”とみられているのであろうか。

(4)　一般教育の成績満足/不満と他科目のそれとの関連──一般教育の成績が良いと他もよい

図4では、一般教育の成績満足/不満層と他の4科目区分のそれとの関連をみた。

ここで特徴的なことは

①一般教育の成績に満足している層は、他の4科目区分の成績にも満足している者が多い。ここからは、まず少なくとも一般教育も成績面で、大学の学習生活に占めるウエイトが大きいことがうかがわれる。

②一般教育の成績に不満な層は、保健体育をのぞく他の3科目区分の成績にも不満をもつ学生が多い。しかし保健体育ではその成績に満足する者(59%)の方が不満をもつ者(40%)よりも多い。この結果をみると一般教育の成績不満層にとって、保健体育は、成績獲得上のオアシスともいえるような特別の地位をもつことが示唆されよう。

次に、上記①でかい間見えた一般教育のウエイトづけの大きさをさらに確めるため、図5では、一般教育とのクロス集計のさいの分母を交換したらどんな結果が得られるかをみた。

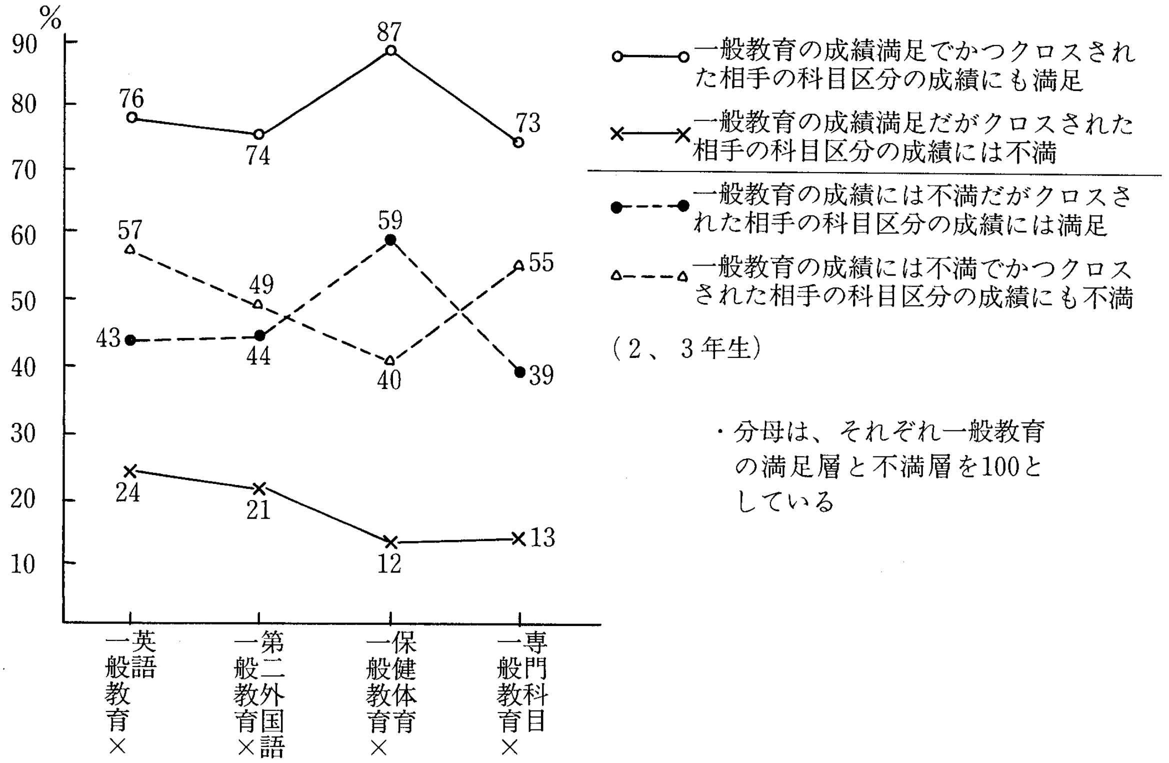



**図4　一般教育の成績満足・不満と他科目区分のそれとの関連（分母は一般教育）**

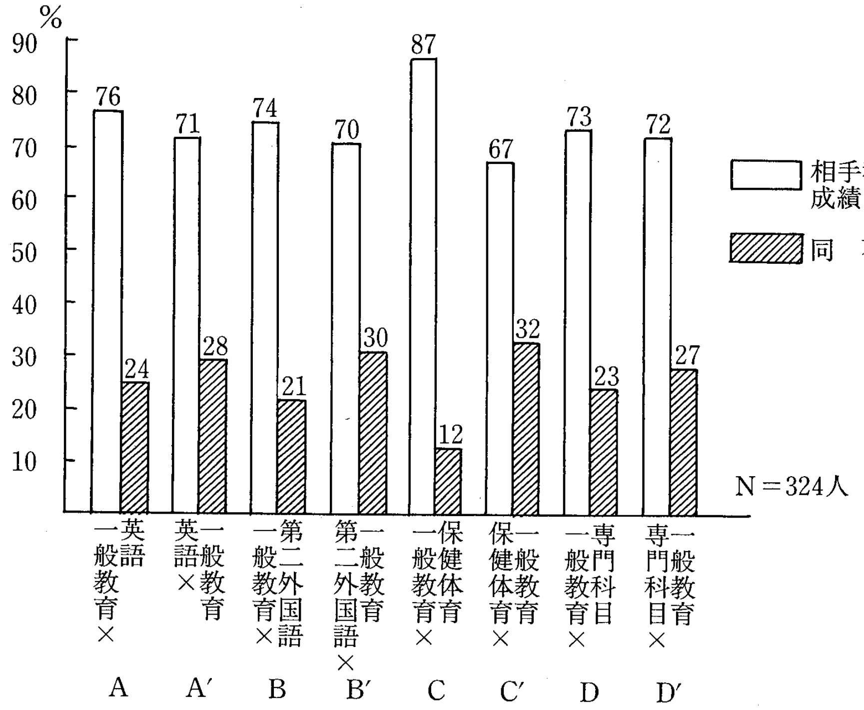



**図5　成績満足層について一般教育と他の科目区分とのクロス集計の分母を交換した比率の比較**

図5のAとA'、BとB'……DとD'をみると、分母を逆にしたからといって、図4で指摘した傾向と全く逆の傾向が現われるわけではないことがわかる。つまり、自分が満足できるような、良い成績がとれる優秀な学生は、一般教育に限らず大体どの科目区分でも良い成績がとれるというわけである。しかし注目される点は、AとA'……DとD'を一つ一つ比べてみると、一般教育を分母にしたケース（A～D）の方が、そうでない場合（A'～D'）よりも、各科目区分の成績に満足している者が多くなり（AとA'では76%対71%など）、不満層が少なくなる（B'とBでは30%対21%など）傾向がみられることであろう。また同じく成績不満層について同様に分析してみた結果が、図6である。

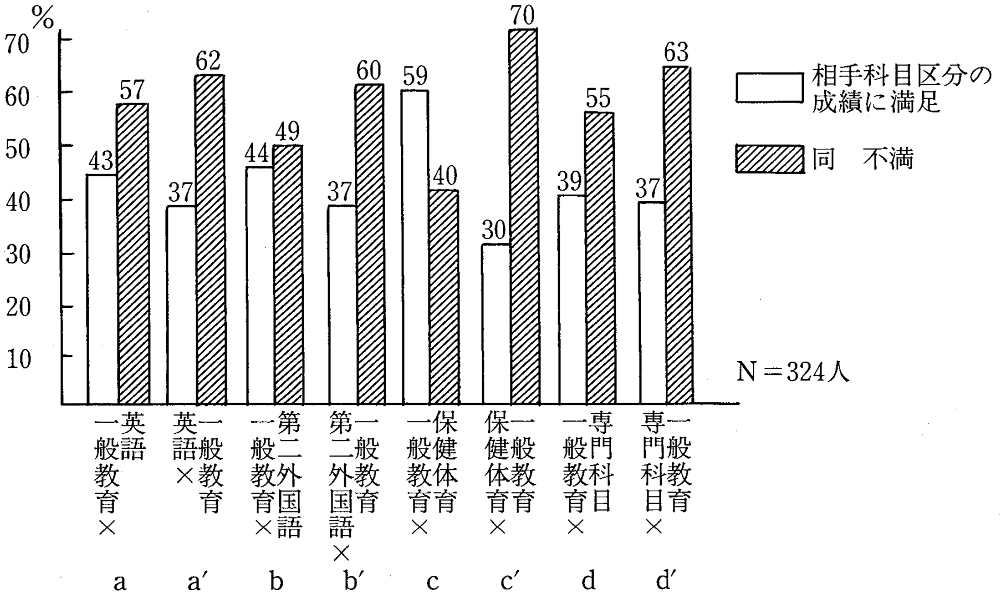



**図6　成績不満層について一般教育と他の科目区分とのクロス集計の分母を交換した比率の比較**

ここでは、図5とは反対の傾向があらわれていることが知られる。つまり、一般教育を分母とした方が、各科目区分の成績満足層が少なくなり（cとc'で59%対30%）、不満層が多くなる（dとd'で55%対63%）ことが指摘できる。即ち一般教育の成績が良い者は他も良く、悪い者は他も悪い者が多いというわけである。

以上の分析によれば今回の調査に関する限り、一般教育科目には他の科目区分に比べて、成績の点で満足できる学習生活を送れるかどうかにかかわる重要な要素が、若干多く含まれている様子がうかがわれる。この背景にはさまざまな条件や要因が作用しているのであろうが、その理由の一つとして、次のようなことが考えられる。つまり、もともと自分が満足できる成績がとれるという意味で優秀な学生は、ほぼどのような科目区分についても良好な成績をあげうる特性をもつ。そしてこの特性がとくに一般教育の成績で比較的強くあらわれるのは、一般教育の内容が人文、社会、自然科学の三分野から総合的に吟味され、組みたてられているほか、レベルや質の面でも、優秀な学生がもつ特性の一つと考えられる強い知的志向をより良く受けとめうる要素をもっている。しかしそうした要素は、知的志向が弱く、満足できる成績を獲得しにくい学生には十分に働かず、これら一般教育不満

層は、図4にみるように体育実技を含む保健体育科目に成績満足感を求めている……。

この仮説からすると、現在大学設置基準の改定に伴って多くの大学で見直しが進められている一般教育は、大学における学習生活の中で軽視しえないウエイトをもつことが改めて示唆され、その再編成にはいっそうの配慮が必要になるともいえよう。しかしこの結果は、単一の調査事例から得られたものであり、その検証のためには今後とも研究をつづける必要がある。とくにこの調査結果が、どちらかというと教養的、学際的性格の濃いカリキュラム編成を重視している、国際学部の学生を対象としていることにも関連があるかもしれず、この点も今後の検証課題となろう。

(5) 出席状況との関連－出席率が他科目区分より低くない一般教育授業不満層

以上みる通り、今後とも研究をつづける必要はあるが、仮に学習生活における一般教育のウエイトが比較的高いとすれば、一般教育の内容が、不満層を含むより多くの学生のニーズを満たすように、いっそう改善される必要がある。

ところで、授業に対する出席状況を全体として尋ねてみた。2/3以上出席者が全体の75%、2/3未満が25%というのがその結果である。全員に欠席理由を聞いた結果では、第1位が「朝寝坊」(64%)、第2位が「授業がつまらない」(47%)である。

出席状況と科目区分別の授業満足/不満との関連をみたのが図7である。

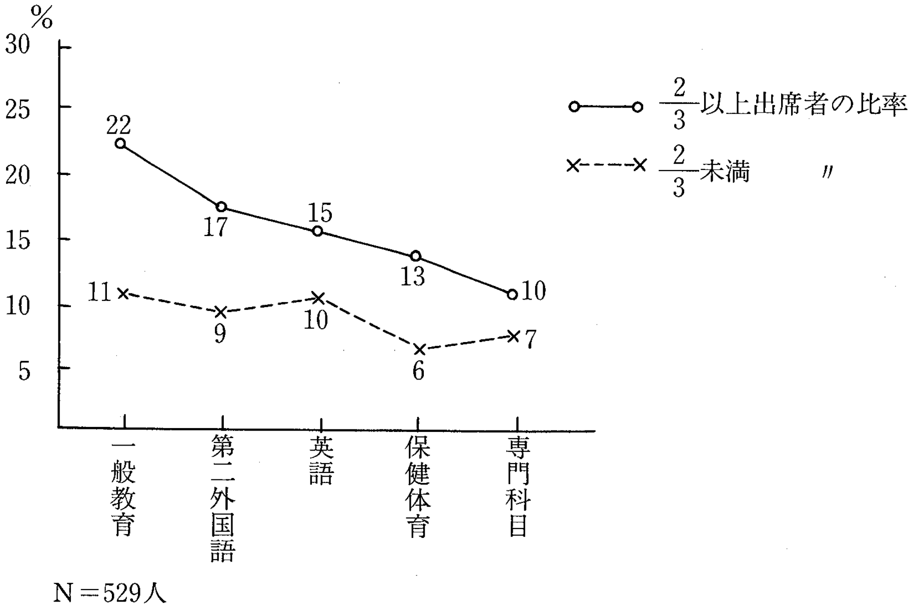



**図7　科目区分別にみた授業不満層の出席状況との関連**

2/3以上出席者の比率がもっとも高いのが、一般教育(22%)で、2/3未満出席者のそれ(11%)の2倍に達している。彼らは、一般教育の授業に不満はもつものの、他の科目区分の授業よりもよく出席しているようで、一般教育の内容面での改善をもっとも待望しているのは、多分この層ではなかろうか。

(6)　実用科目、資格講座開設への関心―1位は実用外国語科目

あれば出席してみたい科目や講座の開設を、10項目中三つまで選んでもらった結果（図8）では、「とくにない」が5％で、ほとんどの学生がこの種の科目、講座の開設に関心をもっている。

第1位は、実用外国語科目（51％）で唯一つ、過半数をこえた。図8の傾向を学年別にみると、多くなっている学年は第1位の「実用外国語科目」が3年生（3年58％、2年47％、1年51％）、5位の「教員資格講座」は2年生で（2年32％、1年25％、3年19％）、また3位の「ワープロ資格講座」が1年生（1年38％、2年35％、3年29％）である。これらは、教育内容の拡大を今後検討するさいの一つの方向を示唆するものともいえよう。

この他、最近話題のボランティア活動に関する授業の開設に関心のある学生が、全体の44％、3年生では49％を占めた。「どちらともいえない」とする者が全体の38％、2年生で44％いるものの、この種の授業への関心も小さくないことがうかがわれる。

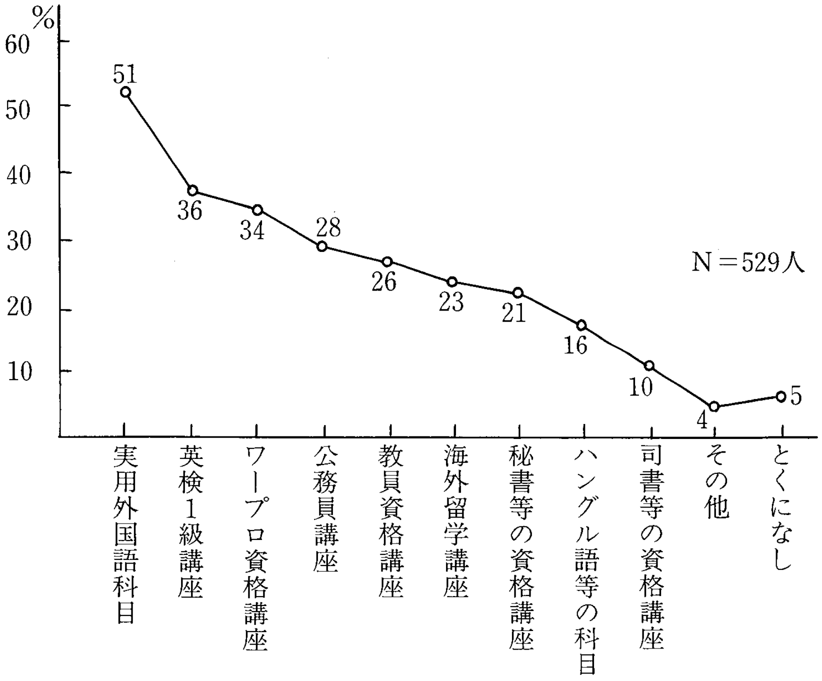



**図8　出席してみたい実用科目、資格講座（3MA）**
**－多い順－**

## 2．教育方法に関する評価

(1)　授業の進め方－もっとビデオ等を活用して勉強意欲の刺激を

授業等の進め方についての期待や要望を、9項目中からいくつでもあげてもらった結果が図9である。「とくにない」が7％で、10人中9人以上の学生が日頃の授業ぶりに対し、何らかの要望をもっている。

第1位の「プリントやビデオを活用するなど授業方法をもっと工夫して勉強意欲が高ま

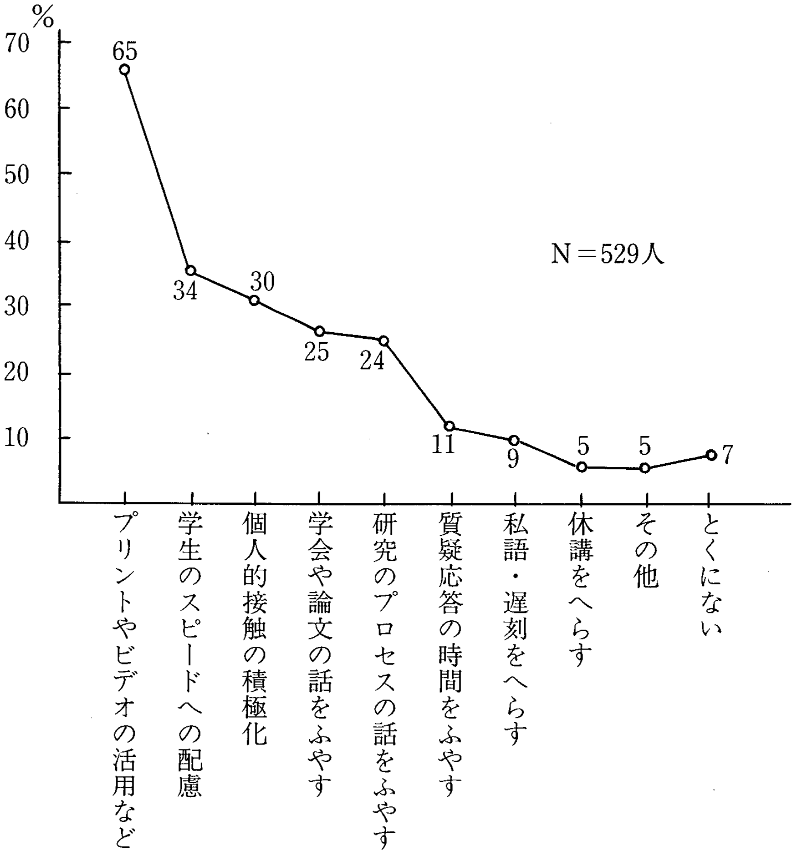



**図９　授業等への要望（MA）**
**－多い順－**

るようにしてほしい」(65%)が、第２位の「学生の反応や理解のスピードにもっと気を配ってほしい」（34%）と30%以上差があるのは、こうしたニーズの大きさを示すものとして注目されよう。これは、学年を通じて第１位（１年生63%、２年生67%、３年生64%）を占めており、学年があがって受ける授業の種類や担当教員が変わっても、ビデオ活用を含む授業方法の工夫を望む声が低くなることはない。

また、一般教育と専門科目で自分が取った成績が満足できるとする学生の中にもこうした要望をもつ者が多く(一般教育で68%、専門科目で65%)、その比率は不満層と大差がない(一般教育で63%、専門科目で68%)。勉強の意欲がいっそう刺激されるように、ビデオ等の活用を求めるニーズは、成績不満層のみならず満足層にも強いことが知られよう。

(2)　学習困難事項－「内容に興味がもちにくい」が過半数

授業を受ける上で困難を感じる点を、10項目中からいくつでもあげてもらった結果（図10）では、首位を「授業の内容に興味がもちにくい」が占め、全体で55%、各学年でも過半数（１年生56%、２年、３年生各54%）に及んでいる。

第２位の「先生の声や黒板の字が小さくてノートがとりにくい」(39%)、３位の「話にまとまりがなく、全体をつかみにくい」(35%)は、大学での学習が軌道に乗ってきたと思

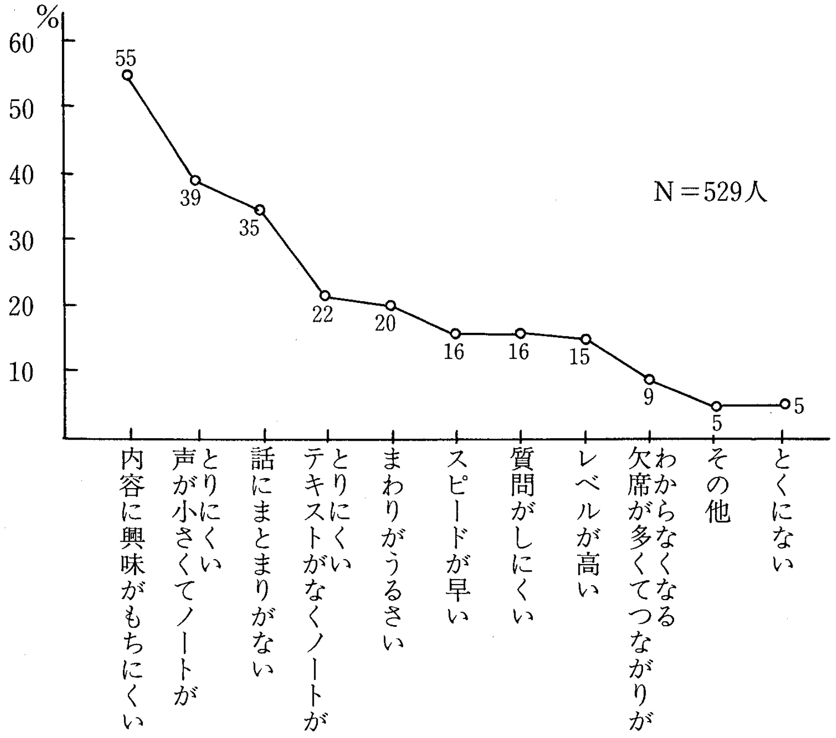



**図10　学習困難事項（MA）**
**－多い順－**

われる２年生で４割以上(それぞれ前者が47％―１年生38％、３年生29％。後者は40％―１年生28％、３年生38％）と多くなっている。この二項目は、前節の「授業の進め方」で第２位を占めた、“学生の反応や理解のスピードへの配慮”とともに、教員側の注意ですぐにも改善できるものと思われる。

大学生の大衆化に伴い、大学が当面する課題の一つに、教育方法の改善があげられようが、授業方法上の問題は、授業内容の十分な理解を妨げる一つの要因ともなりうるわけで、教員側にもいっそうの配慮が望まれよう。

(3)　学習技術－－一般教育授業不満層はテレビ等へ依存

学生がどんな勉強の仕方をしているか尋ねた結果（９項目中複数回答）が図11で、「とくに何もしていない」が９％と、約１割いる。

上位３位は図11にみる通りだが、第３位の「授業以外にもテレビ、新聞、本、雑誌等で知識を得る」（34％）は、学年別で１年生（27％）よりも２、３年に多い（各38％）。また、一般教育授業の満足層と不満層ではこの学習技術をあげるのが、満足層25％、不満層40％と、後者に多い（図12）。

この比率が専門科目授業の不満層では29％にとどまっていることを考えると、前章でみたように、学習生活の上でわりにウエイトが大きいと思われる一般教育の授業に興味がもてない層がとりわけ、知識吸収を補うメディアとしてマスコミを重視している様子がうかがわれる。

また図12の９項目中では、不満層が満足層を上廻る大差をつけているものはこの項目だ

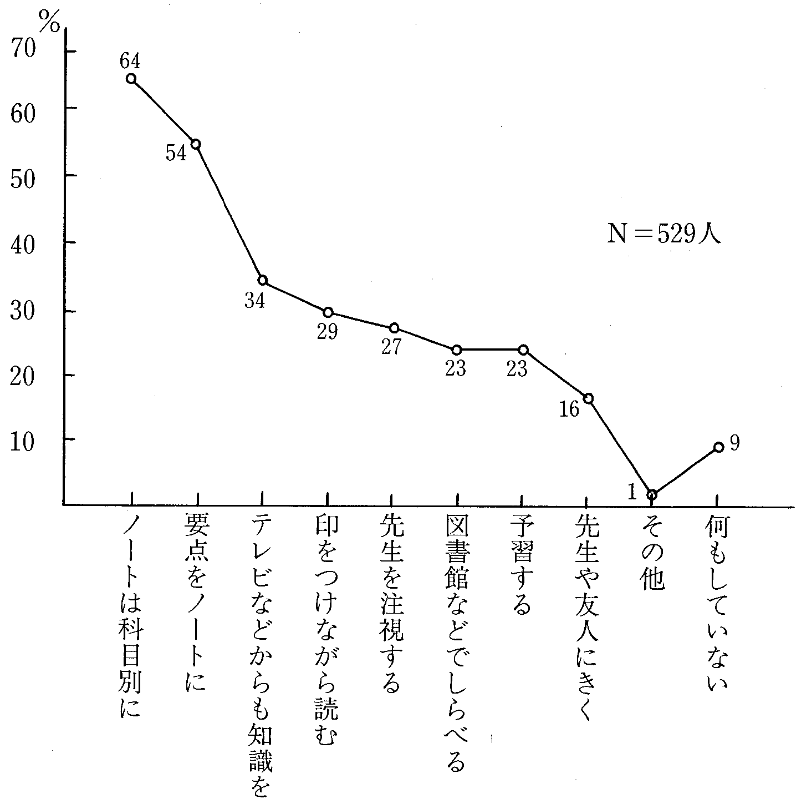



図11　学習技術（MA）
―多い順―

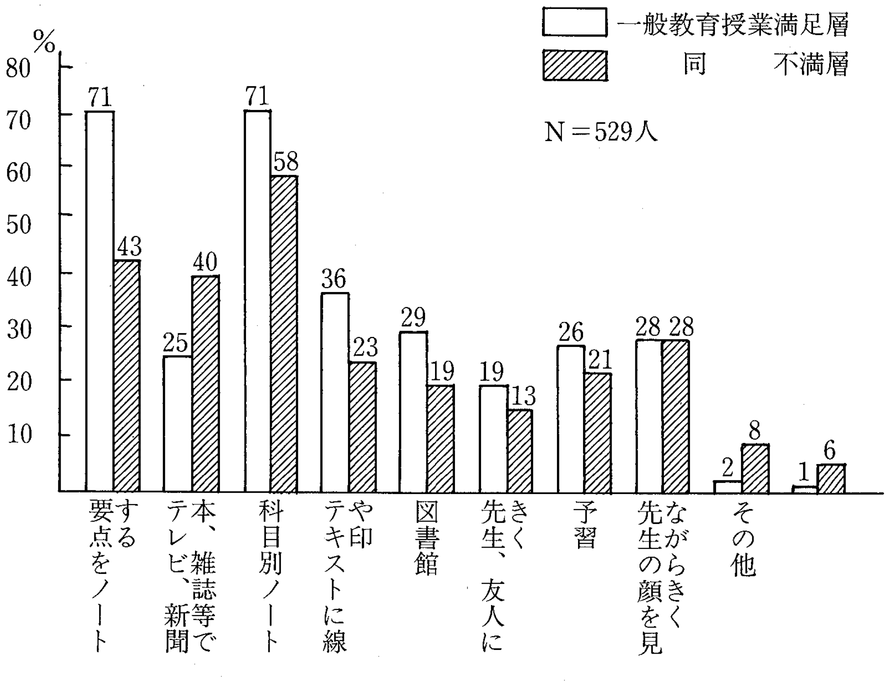



図12　一般教育授業満足層と不満層の学習技術

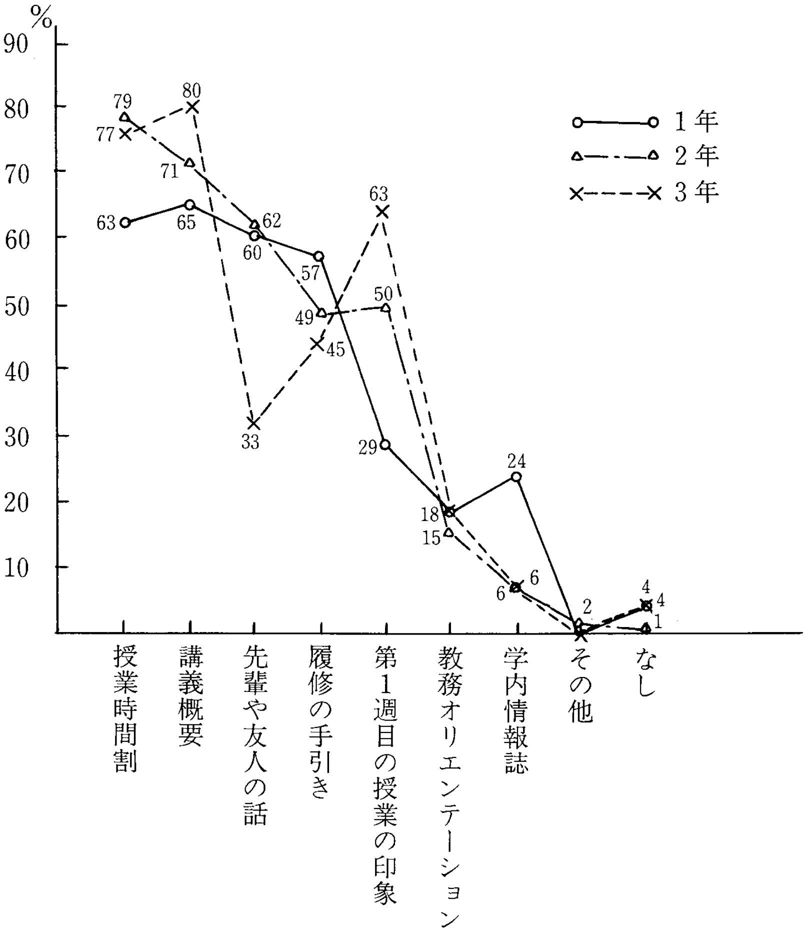
けであることをみると、彼らの学習意欲を授業の上で喚起するヒントの一つとして、マスコミがとりあげている時事性、現代性のある問題や、マスコミ独特の情報提示方法を授業中にとり入れてみることが有効かもしれない。

授業に積極的な態度を示す学生のみならず、消極的な学生をも満足させるような授業の開発、改善は必ずしも容易なことではあるまい。しかし、図11や12で明らかになったように、学生自身がどんな学習技術によって勉強を進めているかについて、教員側も十分な認識をもつことが、教育方法の改善を考える基礎資料の一つとなりうるものと思われる。

### 3．学習活動のサポート指導にかかわる評価

(1) 履修計画作成の参考資料—1年と3年では利用資料に差

学年始めの履修計画作成のさいに、どんな資料や情報を参考にするか、8項目の中からいくつでもあげてもらった。これらのうち過半数を占めたものが順に、①授業時間割(73%)、②講義概要（71%)、③先輩や友人からの情報（54%)、④履修の手引き（51%)の四つである。なお、⑤授業第1週目の先生の印象や授業ぶり（45%）が、これにつづいている。




N＝529人

図13 履修計画の参考資料・情報（M.A）－学年別－

回答の学年別分布が、図13である。各項目の中での学年分布に差があるものは、3年生で「講義概要」と「第1週目の授業の印象」が多く（それぞれ80%と63%)、「先輩や友人の話」が少なくなっている（33%)。一方「履修の手引き」と「学内情報誌」が1年生に多いが（それぞれ57%、24%)、逆に3年生に多い「講義概要」や「第1週目の授業の印象」が少ない（65%、29%）など、この両学年には異なる特徴が見うけられる。

最近、学生の履修計画作成の便宜を図るため、シラバスを用意する大学もふえているようである。学生側が参考にする資料の中では、「授業時間割」という物理的制約を示すものをのぞくと、「講義概要」が全体で7割強、3年生では8割と最高の利用率を示している。これらの傾向からすると、授業スケジュールなどいっそう詳細な情報を含むシラバスの作成は、学生側のニーズにもこたえうるものと思われる。

(2) 科目選択―楽勝志向のある一般教育授業不満層

個々の履修科目の選択にあたって主に参考とするものを、9項目中から三つまであげてもらった（図14)。図14にみる上位5位の順位は、1～3年生を通じて変わらない。

選択の結果としての授業と成績の満足、不満との関係を探るため、学習生活でのウエイトの大きな一般教育を例に、まず授業満足層と不満層とで差がある項目をみたのが図15で

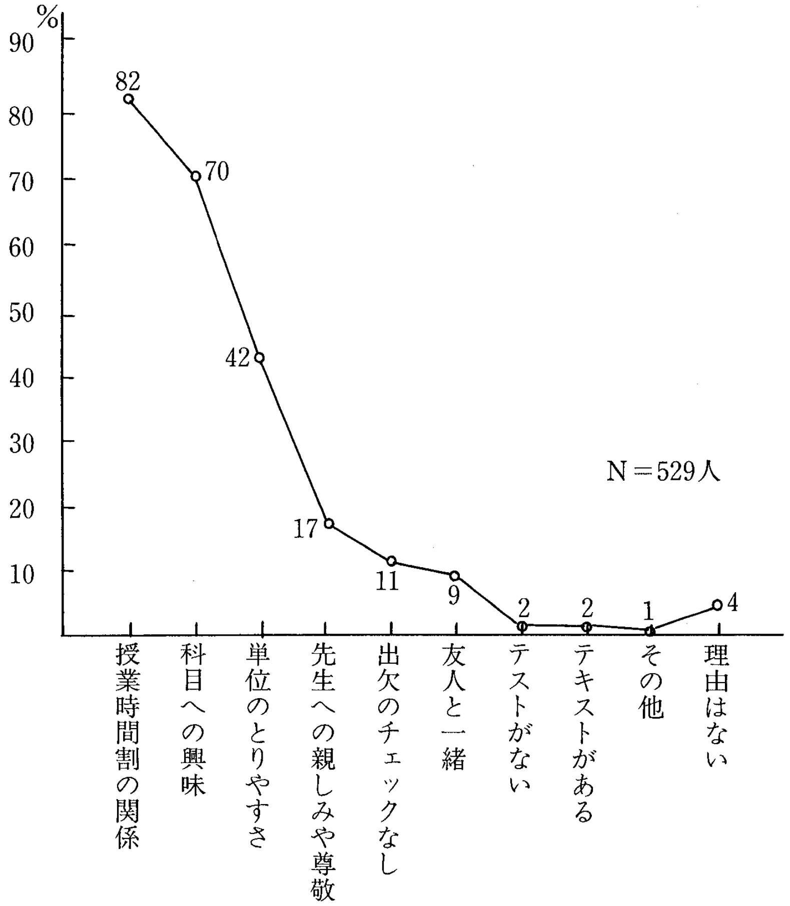



**図14　科目選択の理由（3MA）**
**―多い順―**

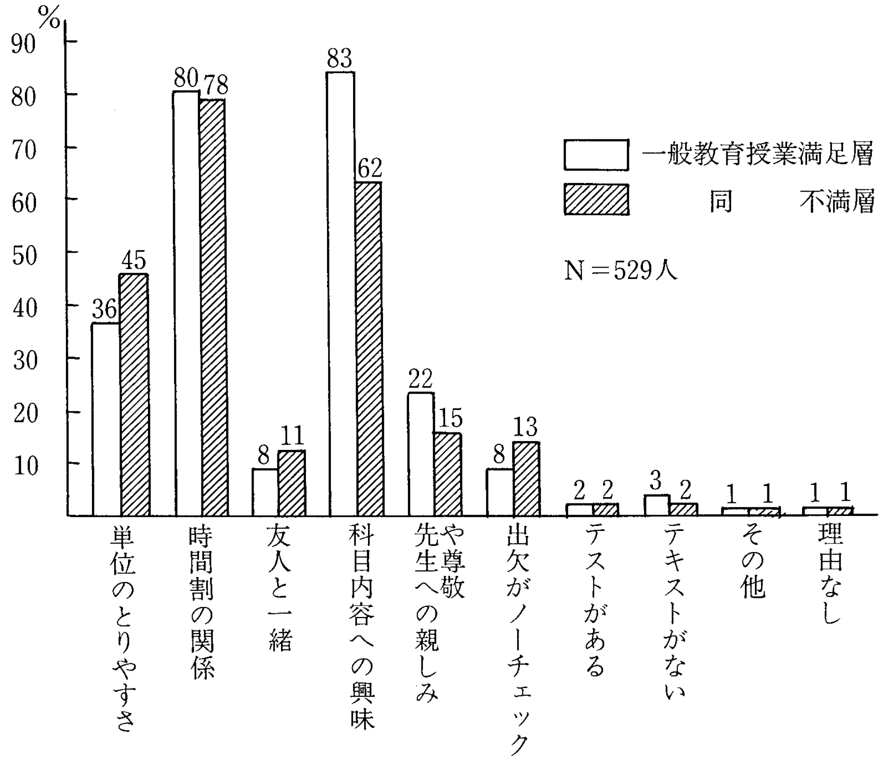



**図15　一般教育授業の満足層と不満層の科目選択理由**

ある。満足層が不満層を上廻るのが、「科目内容への興味」（満足層83％、不満層62％）、「先生への親しみや尊敬」（同22％対17％）である。また逆に不満層が満足層を上廻っているのが、「単位のとり易さ」（36％対45％）、「出欠がノーチェック」（８％対13％）である。これらをみると、一般教育授業の不満層は、科目選択にあたって自分の関心や興味によるよりも、いわゆる「楽勝科目」をねらう傾向が強いことがうかがわれる。両層間に勉学志向の濃淡差がみられよう。

次に、この楽勝志向と成績との関係を探るために、図16を作成してみた。成績満足層より不満層に多い理由が、「単位のとり易さ」（満足層41％、不満層46％）、「出欠ノーチェック」（同10％対15％）である。一方満足層に多い理由は、「時間割の関係」（85％対78％）、「科目内容への興味」（75％対70％）、「先生への親しみや尊敬」（23％対18％）となっている。こうした結果からは、科目選択上の楽勝志向が、一般教育での好成績獲得には必ずしも結びつかない様子がうかがわれる。

### (3)　学習活動のサポート指導―約９割の学生が指導を求めている

勉強をつづける上で指導してもらいたいことを９項目中三つまであげてもらった結果（図17）では、「とくになし」が11％と、全体の９割近い学生にその希望がある。上位５位を占めた項目は、図17に見る通りだが、学年別では学年が進むにつれて増加する傾向のあるものが、「レポートの書き方」（１年生39％、２年生48％、３年生52％）、「本や資料の読み方」（同19％、23％、27％）、「辞書や参考文献の使い方」（12％，18％，23％）である。

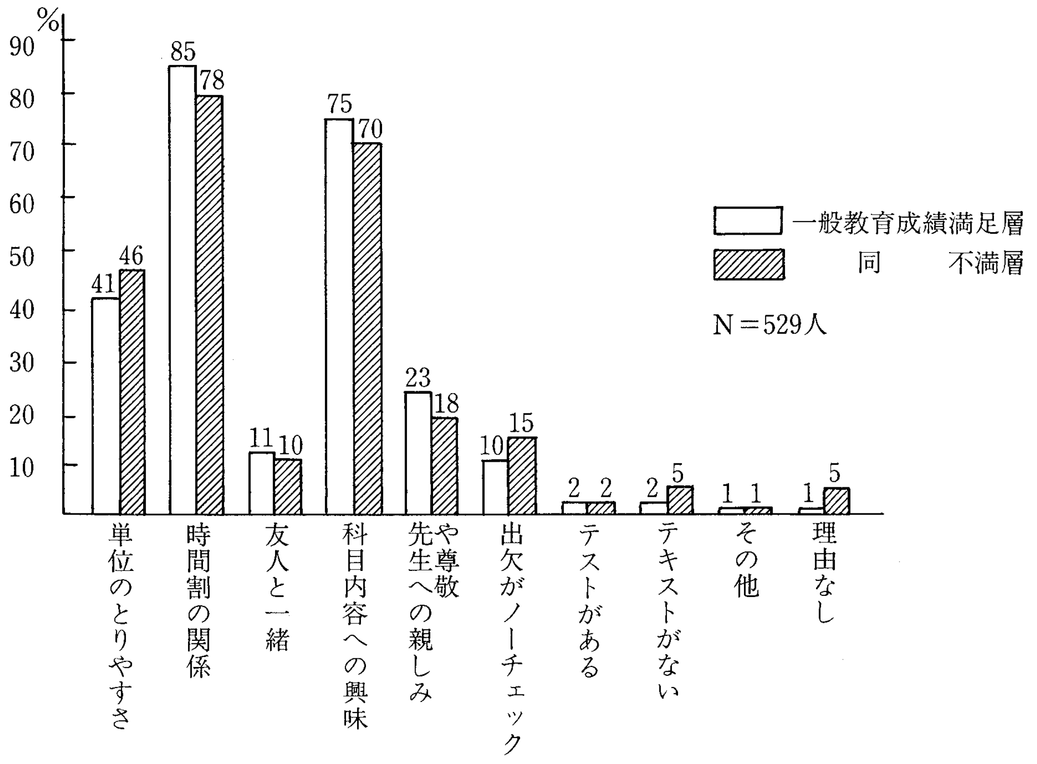



**図16　一般教育の成績満足層と不満層の科目選択理由**

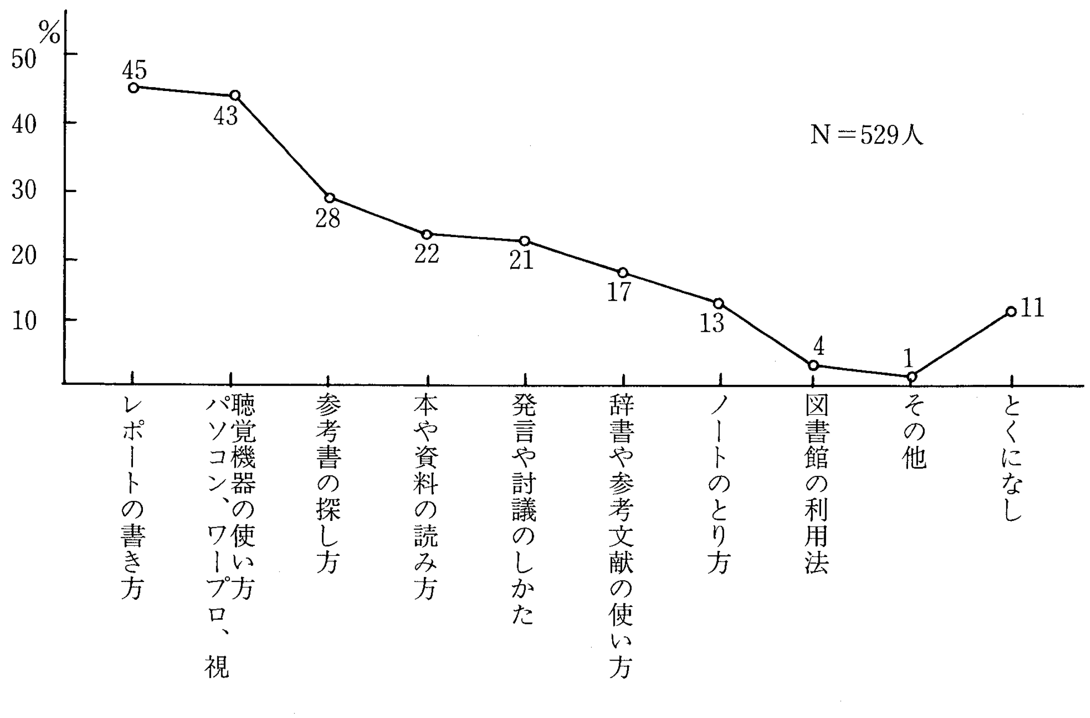



**図17　学習活動のサポート指導に関する要望（3MA）**
**－多い順－**

また、3年生に比し1～2年生に多い項目は、「パソコンやワープロ、視聴覚機器の使い方」（1年生43%、2年生47%、3年生37%）で、とくに1年生が全項目中この指導をもっとも多く希望している。

全体の中でこの項目が第2位を占めた（43%）ことや、とくにこの項目の指導を1～2年生が求めていることは、学生が学習活動を進めるための利用メディアについて、ペンや鉛筆といった伝統的なメディアと、電子的メディアとの共存が待望されつつあること、そしてその利用指導を、とくに大学在学前半期（1～2年生）の学生が強く求めていることを、改めて示唆するものであろう。

また、「レポートの書き方」と「パソコン等の指導」は、一般教育授業の満足層では全体と同じ順位の1位と2位を占めている（それぞれ49%と39%）。しかし不満層ではこの順位が逆転し、「パソコン等の指導」が1位である（それぞれ45%、42%）。こうした傾向をみると、一般教育の授業に積極的な興味を示さないこの層には、パソコン等新しい学習メディアの利用指導を早目に行うことが、学習への積極的態度を作る一つの動機づけのヒントになりうるかもしれない。

以上、学習サポート指導ニーズの一端に触れてみた。こうしたニーズを約9割の学生がもっているという事実は、大学の大衆化の中で学部教育の実をあげていくためには、教育内容と方法の改善のみならず、学生の学習活動そのものをサポートする指導体制を組んでいく必要が大きいことを示唆するものと思われる。

**結びに代えて**

最後に、学園生活の目的意識について触れておきたい。9項目中からいくつでもあげてもらった結果が図18である。

この回答を、Ⓐ学問志向か社交志向か、Ⓑ就職志向か教養志向かという二つの軸のもとに四つのパターンを作り、それぞれの回答総%を計算すると、次のような分布となった（「その他」と「目的なし」をのぞく）。

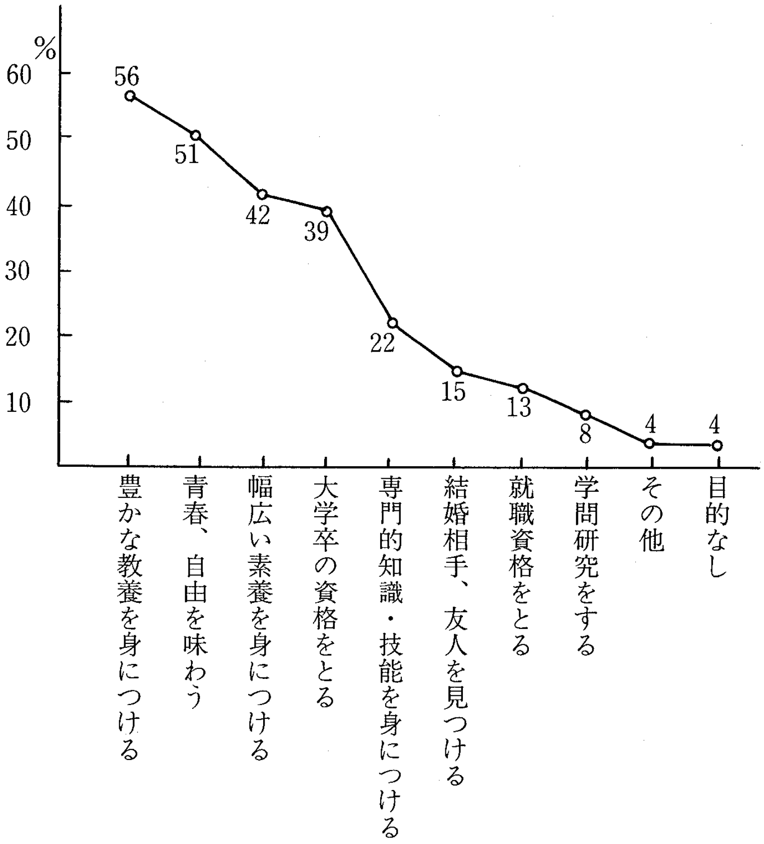
1　学問志向型　　30%
（「学問研究」、「専門的知識・技能習得」）

2　社交志向型　　66%
（「青春・自由を楽しむ」、「結婚相手・友人を探す」）

3　就職志向型　　52%
（「就職資格」、「大学学歴の取得」）

4　教養志向型　　99%
（「豊かな教養」、「幅広い素養」）

「国際」と名のつく学部は、概して教養的、学際的性格の強いカリキュラム編成を行っている所が多いように思われる。上記の結果をみると、全体の分布がどちらかというと学問志向よりも教養志向、社交志向に傾斜しているようで、学部カリキュラムの編成上の特色が、その中で学園生活を営んでいる学生の目的意識とも符合している部分がみられるようである。




N＝529人

**図18　学園生活の目的（M.A）**
**ー多い順ー**

しかしその一方で、学園生活に関する自由意見の記述（記入率40%）の中には、「国際学部全体が何を勉強しようとするのか、はっきりしない」、「何のための国際学部なのかわからない」など、国際学部のアイデンティティの把握にとまどう声もみられる。

18才人口の急減期を迎え、大学設置基準改定が行われた現在、大学が当面する課題の一つとして、変化する環境の中での学部アイデンティティの再確認と教育体制やプログラムの見直しがあげられよう。それらは、一口にいって大衆化している大学生と、これに必ずしも十分に対応しきれていない大学側との間にある、いわゆる「教育的遅滞」解消のための努力として位置づけることも可能であろう。こうした作業の具体化のために、これまで本文中にたびたび例示したように、学生自身による評価結果が資料の一つになりうるものと思われる。

（高等教育教材の制作と評価分析　研究協力者　文教大学情報学部助教授）